

介護福祉実習に対する実習施設側の意識と課題

Attitudes and Problems of Long-Term Care Facilities Personnel toward Care Work Students Training in the Facilities

山下 恵子
Keiko YAMASHITA
尾台 安子
Yasuko ODAI

はじめに

介護福祉士養成教育において、介護福祉実習（以下実習とする）の意義と役割は大きい。実習は、学内の専門基礎科目や教養科目などの講義や演習で学んだ知識の統合をはかり、利用者との人間的なかかわりを通して自らの介護観を形成し、利用者のニーズや日常生活上の課題に沿ったアプローチの方法や技術を身につけていく。しかし、実習はさまざまな課題を抱えている。平成15年の学生に対する実習のアンケート調査で、実習のやりにくさの要因として、職員の忙しさ、実習に対する無関心、指導担当者の不在などがあげられた。¹⁾ 実習施設側の指導体制や学生に対する意識は、実習に大きく影響すると考えられた。今回は、実習施設側に焦点をあて、実習指導体制に対して養成校としてどのようなことが求められているかを明らかにするため、実習受け入れ側にアンケート調査を試みた。そこで今後の実習指導体制を整えていくための課題が明らかになったので報告する。

1. 調査方法および調査対象

N県の介護福祉士養成校の実習施設を対象とし、郵送質問紙法によるアンケート調査を行い、実習受け入れ担当者に回答を依頼した。対象施設数は介護老人福祉施設（以下特養とする）57施設、介護老人保健施設（以下老健とする）39施設、身体障害者療護施設（以下身障とする）11施設、合計107施設。

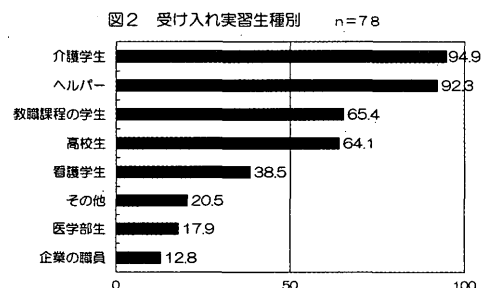
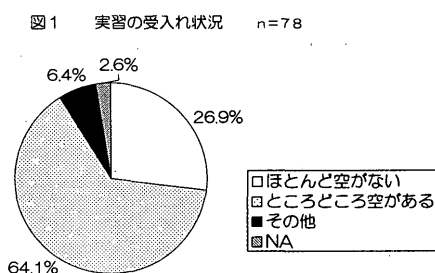
有効回答率は、78施設で72.8%であった。

2. 調査内容と分析方法

質問内容は、実習の受け入れ及び受け入れ体制、指導体制、実習受け入れに対する職員の意識、実習生に対する印象、実習受け入れにあたり困っていること、養成校に望むことの自由記述とした。集計および分析は、Excel 2003、HALBAU(ver5.34)を使用した。

3. 結果

1) 実習の受け入れ状況



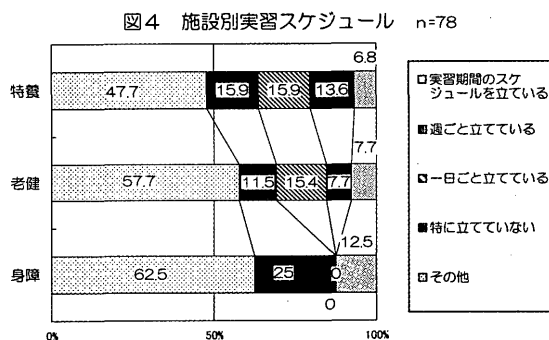
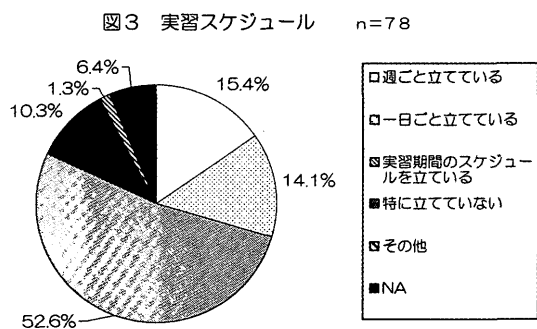
実習の受け入れは、26.9%の施設でほとんど空がなく、64.1%の施設はところどころ空のある状態で実習を受け入れていた。(図1) 受け入れ学生は、介護学生、ヘルパー養成を受け入れている施設が9割を占め、高校生、教職課程の学生が6割、その他、看護学生、医学部学生となっており、学生は多岐にわたっていた。(図2)

2) 実習の受け入れ体制

①実習スケジュールの作成について

受け入れにあたっては、83.1%の施設で実習スケジュールを立てて実習を受け入れていた。立てていない施設は10.3%であった。その中で実習期間全体のスケジュールを立てている施設が52.6%と最も多かった。(図3)

施設別でみると、実習スケジュールを立てていない施設の割合が、特養は20.4%、老健は15.4%、身障は0%で何らかの形でスケジュールを作成していた。(図4)

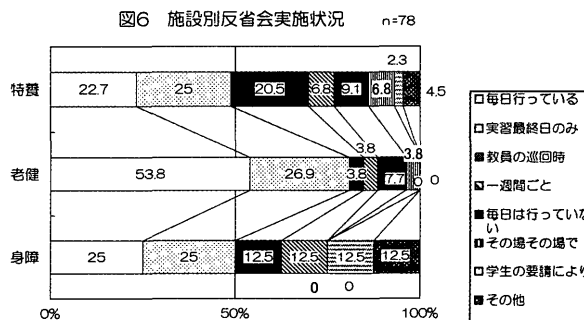
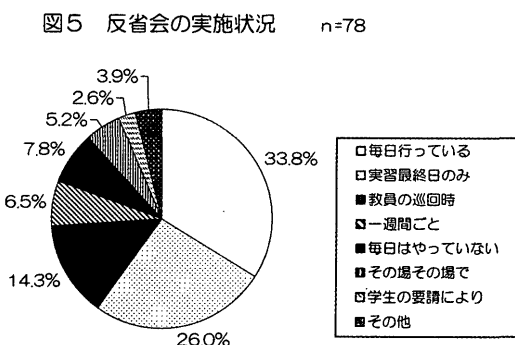


介護の質を求められる中、実習受け入れ施設は、年間を通してほとんど空きがない状態で学生を受け入れており、人的にも時間的にもゆとりのない状態が分かる。しかし、そうした中でも実習スケジュールを立てるなど実習の体系化も考えつつ学生に多くの学びをしてもらいたいと前向きに取り組んでいることがうかがえた。

②実習の反省会について

実習反省会の実施状況は、毎日行っているが33.8%、最終日のみが26.0%、教員の巡回時が14.3%であった。(図5)

施設別で反省会の状況を見てみると、毎日反省会を行っているのは、老健では53.3%で最も高い。実習最終日のみの反省会というのは施設間での差はみられず、それぞれ約1/4の施設で行なわれていた。教員の巡回時に行うというのは特養において多くみられた。(図6)

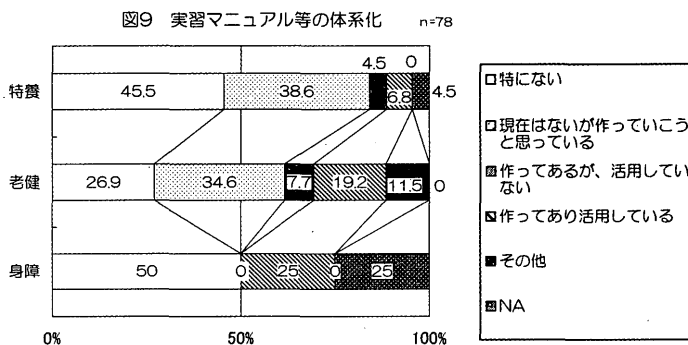
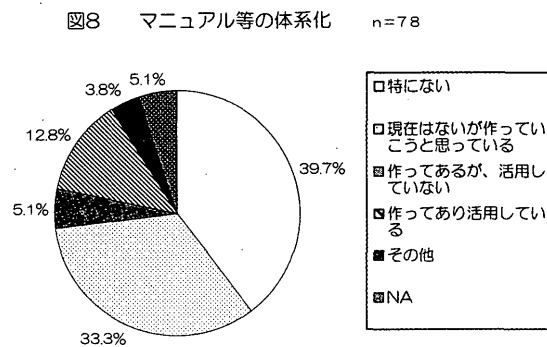
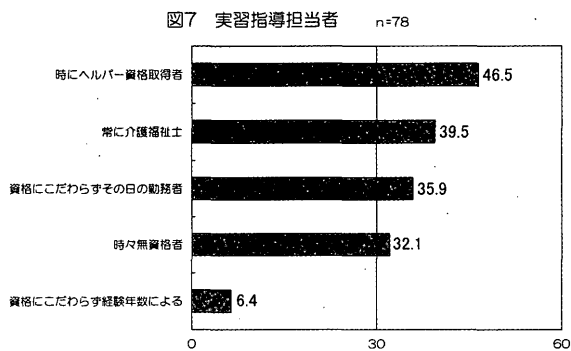


③現場の実習指導者について

現場での指導者は、常に介護福祉士があたっているところが39.5%、時にヘルパー資格者も含んでいる施設が46.5%であった。しかし、資格にこだわらずその日の日勤者が指導にあたっているところやときどき無資格者が指導しているところが3割に達していた。(図7)

実習指導者研修を受講した職員の有無については、52.6%の施設で受講した職員がいた。

実習に対してのマニュアル等の体系化については、作っていない施設が約7割であったが、その半数は今後作りたいと考えていた。(図8) さらに施設別で見ると、特養では8割以上が作っていないかった。(図9)



3) 受け入れに対する職員の意識

受け入れ担当者からみた職員の実習に対する意識は、76.9%が介護職員自身の勉強になると感じており、自分自身の振り返りになるが65.4%で職員自身にとってのプラスの効果があると感じていた。また、利用者の表情が明るくなるなど利用者にとっても半数以上がプラスの効果があると感じていた(図10) 一方、マイナス志向では4割近くが時間の不足や、仕事量の増加に対して負担感を感じており、指導方法に対しても困難を感じていた。約2割が実習に対する学生の姿勢に不満を感じていた。(図11) 受け入れ側も実習を受け入れることで勉強にはなることは分かっているが、人的ゆとりのなさや時間的なゆとりがなく十分に指導できないこと、指導力に対しての不安などジレンマを感じていることがわかる。実習施設種別間ではプラス志向、マイナス志向とも意識に有意差はなかった。(図12、図13)

図10 受け入れ側の意識（プラス面） n=78

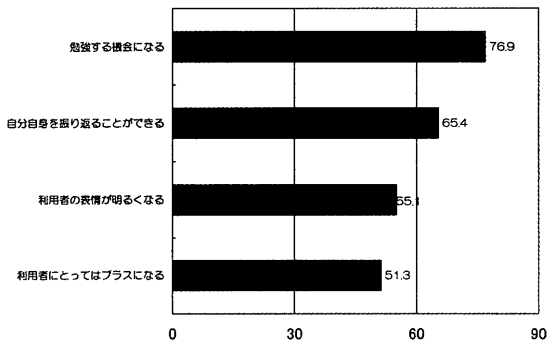


図12 施設別受け入れ側の意識（プラス面） n=78

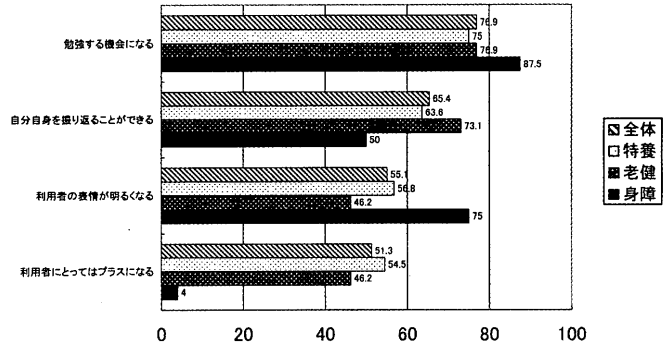


図11 受け入れ側の意識（マイナス面） n=78

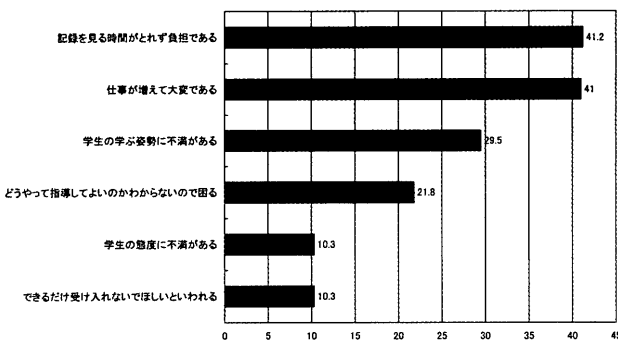
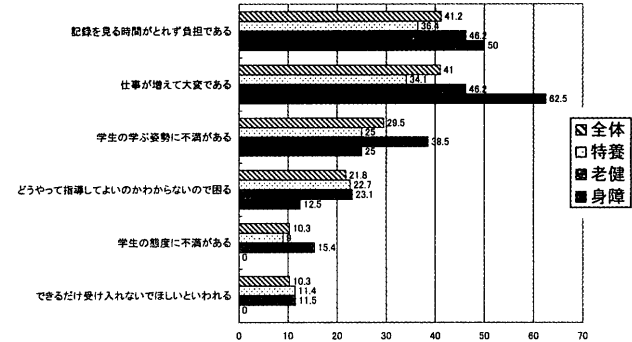


図13 施設別受け入れ側意識（マイナス面） n=78



4) 実習生に対する印象

丁寧に利用者とかかわっている、明るいという項目で8割以上がよい印象をもっていた。職員との協調が取れる、積極的である、あいさつができる、元気がある、実習計画が立てられる、研究心・探究心がある、目的を持って実習に臨んでいるというすべての項目で6割以上がよい印象をもっていた。(図14) 一方、マイナス面での印象に対しては、質問が少ない、応用がきかない、意思表示ができない、声が小さいという項目で約6割近くがマイナスの印象をもっていた。

図14 指導者から見た学生の印象（プラス面） n=78

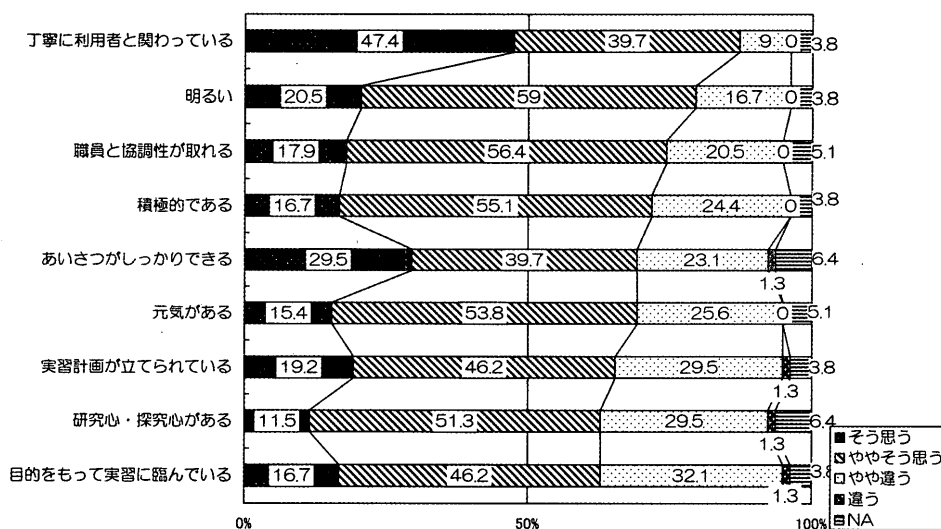
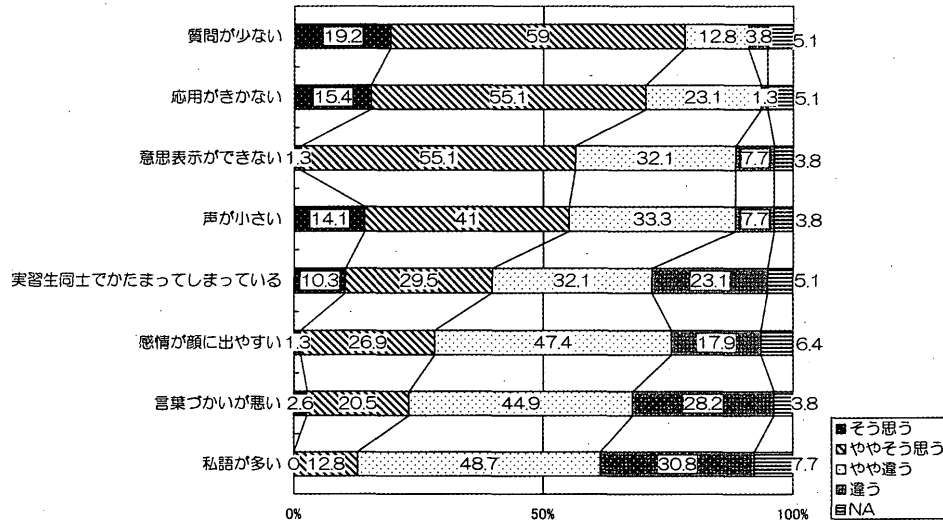


図15 指導者から見た実習生の印象（マイナス面） n=78



5) 実習の受け入れに対して困っていること

表1 実習受け入れに当たり困っていること

カテゴリー	回答数	%
学生の目的意識のなさや積極性	19	30.2
人的・時間的ゆとりがない	11	17.5
指導力に対する不安	9	14.3
挨拶や言葉遣い、声がけができない	6	9.5
実習生受け入れ人数による指導のしにくさ	6	9.5
指導内容の到達度に対する不安	4	6.3
その他	8	12.7

53.8%の施設で自由記述の記載があった。その63件を7つのカテゴリーに分類して検討した。

自由記述のうちもっとも回答が多かったものは、「実習課題や実習目的が学生の中でははっきりとしていない」「意思表示ができない」「実習時間をただこなしている姿勢が見られる」など実習に対する目的意識のなさや積極性のなさがあげられ、全回答数の約30%に

及んでいた。学生の姿勢に対してどのように指導すればよいかわからないことがあげられていた。

次に、「施設職員の人員削減により指導体制がとりにくくなっている」「職員が病欠等で手薄になっているときに介護業務に支障をきたす」など人的なゆとりがないこと。「勤務時間外にも指導が必要となり負担が大きい」「ケアプランの立案までの一連の記録の指導が時間外になり負担」など指導が勤務時間外にまで及び時間的なゆとりがないことがあげられていた。

「指導者研修の未受講」、「教育をできる指導者がいないこと」、「自分自身が勉強不足で指導に対して不安がある」など指導者自身の指導力に対する不安が15%近くあった。学生に対して充実した指導を行いたいという姿勢がうかがえた。

「実習生がどれだけ学んでいるのか分からない」「どこまで短時間で教えていくのかに難しさがある」など実習の到達度に対する不安を抱えながら指導にあたった。また、受け入れ人数については、実習生の受け入れ人数が多くなることにより指導体制がとりにくくなることやきめ細かな指導を行うためには、少人数での指導が効果的と考えていた。

4. 考察

今回の調査において、施設側実習受け入れ状況が理解できた。実習というものを前向きにとらえより良いものにしていく姿勢も伝わってきた。しかし、実習を受け入れる施設としての課題と実習に出す養成校としての課題とがある。このことを以下にまとめてみた。

1) 実習受け入れの過密さからくる指導負担

実習受け入れは約8割の施設が好意的にとらえているが、9割以上の施設で実習をほぼ空がないほどに受け入れている。このことは介護現場では大きな負担となっていると考えられる。

また、ヘルパー養成の受け入れを全体の9割の施設が行っており、教職課程の学生や高校生が6割に及んでいることから、施設における実習の受け入れにも課題があると思われる。各職種の養成の実習目的は違うものであるが、それがどのように区別され、現場の職員に徹底できているか疑問を感ずる。しかし、広く正しく介護の現場や介護の仕事を理解していくためには、実習は必要なことである。各職種の実習を受け入れ、効果的なものにしていくことは、養成校は元よりではあるが施設側の責務でもあると考えるのは酷であろうか。しかし、実習生という外部者が入ることは、施設をより良いものにしていくきっかけになる。どこかで実習の指導負担を改善する方法を誰かが考えていかなければならない。

指導負担を改善するには、養成校との連携がもっと密に図られ、互いに補い合える関係を作っていかなければならない。指導マニュアルを養成校とともに作成できたらと考えている。そしてそれが現場の職員に徹底されていくと、指導者自身の負担や不安が軽減でき、学生指導がしやすくなる。

今回は職員の負担感については本調査では明らかにできないが、実習の受け入れに対する現場の職員の負担感についても調査する必要性を感じた。

2) 効果的な実習を促すための反省会

施設側は、実習受け入れにあたりスケジュールをたて、指導者には介護福祉士があたるような配慮を行い、少しでも有意義な実習が行えるように努力していることが分かった。しかし、介護福祉士の養成教育において、介護の質が求められているにもかかわらず、現場では無資格者やヘルパー資格者が指導にあたらざるを得ない状況であることがわかる。前回の学生に対する実習の調査²⁾で学生の実習のやりにくさの中にあつた、指導者によって言うことが違うや質問の答えが返ってこないということと関係してくる。実習教育の重要性を考えると介護福祉士の有資格者が指導にあたるべきであると考えられる。また実習のやりやすさでは、ほぼ毎日反省会を持ってもらえることがあがっていた。今回の調査では、反省会を毎日行っている施設は33.8%となっており、老健では53.8%が行っていることがわかった。反省会は、指導者が学生のために時間をとり、その日のわからないことや困ったことなどを落ち着いて出せる場である。たとえ5分でもその日の振り返りを学生に促すことでより効果的な実習につながると考える。

学生に対して、かかわりの丁寧さや明るさなどよい面を認め、さらに利用者にも学生が関わることでの利点を感じ取っていた。また、指導者自身が自分の振り返りや勉強の機会ととらえ指導にあつたてもらっていることはありがたいことである。しかし、学生にはその場の職員の様子や現場の雰囲気を実習のやりやすさをとらえており、自分たちの実習が現場にどのような

影響を与えているかまでは受け止められていないため、現場とのズレが生じていると考えられる。このズレを埋めていくためにも、学生の実習を通しての学びと現場の指導の間で反省会等の充実を図り、学びを共有化していくことでより効果的で有益な実習ができると考える。

3) 学生の目的意識の無さと実習指導体制の未成熟さ

自由記述の中で、学生の目的意識のなさや積極性に対しての指摘が多かった。また、指導者からみた実習生の印象においても質問が少ない、意思表示ができない、声が小さいなどの項目が約6割であった。実習に対する学生の意識を高めるためには、学生一人一人が個人レベルで実習に対しての目的を明確にすることが重要である。また、介護福祉士の資格を取るという動機付けが必要である。そして介護福祉実習がどういう形で行われていくか、どのような実習課題があるのかが、学生が具体的にイメージできるようにしていく必要がある。実習に対する目的意識を各自が明確にもてるような工夫が必要である。授業自体の工夫を考えていかなければならない。単に実習指導の時間だけでなく、教育カリキュラム全体の中から学生の目的意識や積極性というものを養っていく教育をしていかなければならない。

現代の学生は自分自身で考えることを苦手としている。考えたことをきちんと文章にすることができない。介護実践も単に経験を積み重ねるだけでなく、きちんとその根拠をとることが考えられて実践につながるものでなければならない。介護の質を向上させていくためにも思考過程を訓練していかなければならない。

目的意識が薄いから積極性が出てこないということも考えられるが、実習そのものの体制が未成熟であるということも考えられる。国家資格である介護福祉士養成の実習にきちんとした指導者が当たることができない現実も見逃してはならない。約4割の施設が、実習は常に介護福祉士に行わせているが、無資格の職員が指導に当たらざるを得ない現状を施設側も養成校側もそれでよしとしてはいけぬ。実習教育の重要性を考えたときに当然のことながら指導者研修の受講の義務付けや、実習教育受け入れ施設に対しての国の補助もあつてしかるべきと考える。介護福祉士資格の国家試験の体制の見直しがされてきたことと、施設介護職員の有資格を規定する動きも出てきているのを期待していきたい。

参考文献

- 1) 尾台安子 山下恵子 介護福祉実習に対する学生の意識と課題 vol.10 no.18
介護福祉教育 2004
- 2) 1) 再掲